

いじめで死なせないを読んで

大阪市立旭陽中学校 三年 村田 亜聡

一年前、この本が届いた。送り主は著者である岸田雪子さんだ。ぼくは、一気に読んだ。

この本では、岸田雪子さん自らが、丁寧に取材をし、被害者本人や被害者家族、被害者遺族の心に寄り添いながら、子ども達の命を救うために周囲の大人は何が出来るのか、対策はどうなっているのかがわかりやすく書かれている。この本に出てくる二つがぼくの事例だ。

最初、この本の取材のお話をいただいた時もものすごく驚いた。ぼくよりも苦しい思いをしている子どもはたくさんいるのに、ぼくなんかでいいのかと思っただけだ。岸田雪子さんと実際にお会いして話をしていくうちに、真剣に子ども達を救いたいという思いが伝わってきた。本当にうれしかった。ぼくの事もたくさん気遣ってくれた。がんばってきた全ての事が認められたようでうれしかった。

この本を読んで、被害者の気持ちが届くほどわかって苦しかった。ぼくも、同じ思いを経験したからだ。心が弱いからいじめられるのだという人もいるけれど、それは違う。誰でもいじめられると心が弱くなってしまふ。いじめ

られていい理由なんてないし知りながらも、自分にいじめられる原因があったのではと考えてしまふし、いじめられる事を周りに知らせるべきだとわかつていても、自分が誰からも必要とされていない、まるでこの世に必要な人間だと自分自身が認めてしまふようで、みじめすぎてなかなか出来ない。だからこそ、周囲の大人がSOSに気づいて心に寄り添い、適切な対応をする事が何よりも大事なのだと思う。この本には、こどものSOSの気づき方についても書かれているので、より多くの人に読んで欲しいと思った。

この本の中でぼくの事案は一部しか書かれていない。でも、本当はもっと多くの人達に支えられて、ぼくは生き続けると決めた。

ぼくは、小学二年生の時、いじめでPTSDを発症した。学校や周囲の理解が得られなかったため、環境も病状も悪化した。いじめそのものも苦しかったけれど、いじめが周囲にわかった後の学校の不適切な対応には、もっと、苦しんだ。少なくとも、いじめだとわかれば、先生は助けてくれると思っていたのでぼくは学校全体にとって邪魔な存在なのだと感じ何度も死にたいと思った。でも、ぼくは今も周囲の支えによって生きている。一番は、家

族の存在が大きかった。学校に行きたいと思うあなたの気持ちは間違っていないと、家族はほくの思いを肯定し続けてくれた。特に、お母さんはすごかった。子どもが学校に行きたいと言ったら、大人はどんな事をしてでも行かせてあげないといけない。みんな仲良く学校に通えてこそ、平等。どうすれば学校に安全に通えるのか、みんなで考えないと行けない。と言って、助けてくれそうな場所全てに相談行ってくれた。ほくにも本を読む事、いろいろな経験がつかめるから。と言って、本をたくさん買ってくれたし、いろいろな図書館に連れて行ってくれた。ほくの気持ちを理解してくれそうな人や人権を学べる場所にも、たくさん連れて行ってくれた。生きて欲しい。と思ってくれる人が、家族以外にもいてくれる事になった。次に、たった数人だけど、学校の中に寄り添ってくれる先生がいた事もほくにとつて大きかった。

PTSDを発症してからの一年間は、ほくの病状や状況について、一部の先生しか知らなかった。でも、二年経った頃、どうしてよいかわからず、学校で泣いていた母を見た。一部の先生が、思っていたより深刻な状態である事に気づき、教育を受けさせてあげないといけない。と家庭訪問をしてくれるようになった。先生は、苦しいほくの気持ちを全て受け止めてくれた。そして、学校は無理して

行く所ではない。無理しなくても行ける所でないといけない。重聡にとつて、学校が安全で安心して通える場所でないなら、それは先生が悪い。力がなくて、本当にごめん。先生、頑張るから。と言ってくれた。そして、校長先生にもほくの思いを伝え続けてくれた。

いつでも、ほくの味方だった。校長先生に思いが伝わるまで、長い月日がかかったけど、踏ん張れたのは、間違っていない。とほくの思いを肯定し続けてくれた家族や先生がいたからだと思う。

ほくは今、同じように苦しんでいる子ども達に寄り添える仕事が出来たいと思っている。経験から来る言葉だからこそいやせる心がある事を知ったからだ。ほくのようには傷ついている子には、とにかく生き続けて欲しい。誰かをいやせる人にきつとなれると思うから。

この本には、子どもを救うためのヒントが多く書かれている。みんなで読んで、どうすれば全ての子ども達が命だけでなく心も救われるのか、そして、安心してやり直すための考えるきっかけになって欲しいと思った。

「いじめで死なせない」

著 岸田 雪子

新潮社